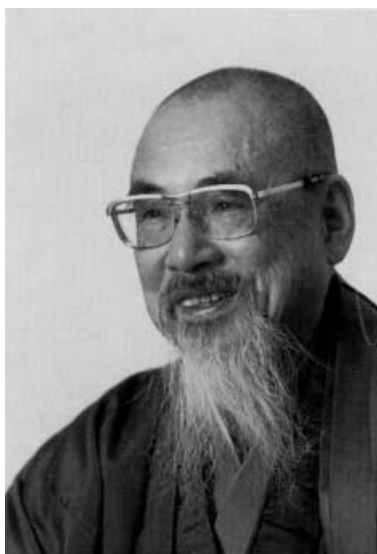


FAITH

キリスト教と仏教の共通の根拠

一禅者から キリスト教徒への提言

スイス・ツークで開催された第1回キリスト教・仏教
対話集会における講演(1994年7月)より抜粋



秋月 龍珉

あきづき・りょうみん

1921年、宮崎市生まれ。東京大学文学部哲学科卒業。同大学院修了。花園大学教授・埼玉医科大学名誉教授・禅僧。著書に、『秋月龍珉著作集』全15巻、『道元入門』『公案—実践的禅入門』『禅門の異流—一休・正三・盤珪・良寛』『禅仏教とは何か』『世界の禅者—鈴木大拙の生涯』『正法眼蔵を読む』『新大乘—仏教のポストモダン』など多数。共著に八木誠一博士との宗教哲学討論集『親鸞とパウロ』『禅とイエス・キリスト』『ダンマが露わになるとき』など。

はるばる日本の東京から参りましたゼン・マイステル秋月龍珉と申します。本日こうしてお招きにあずかり、皆様とお目にかかれましてことに感謝いたします。

私はまず、30年まえの第二バチカン公会議が人類に与えた偉大な恵みに心から敬意を表します。このカトリックの世界的な会合におきまして、エキュメニカル・ムーブメントと呼ばれる決定がなされました。これは唯物論に立ち向かうためには、同じイエス・キリストを信じるクリスチャンが、カトリックとプロテスタントとギリシア正教に分かれているのは望ましくない。世界教会建設の運動、ないし「教会再一致運

動」を進めなければならないという重要な決定です。と同時に「諸宗教の対話」という路線が、そのとき初めて打ち出された、誠に記念すべき会合でありました。

それまでのカトリックは、カトリックの信仰だけが人類普遍の真理であると主張していました。もしそうであるならば、「君たち異教徒は、悔い改めてカトリックになれ」というしかありません。これを突き詰めますと、十字軍のような痛ましい宗教戦争を肯定する考えにつながります。それでは地上には永遠に平和は実現できません。これに対して、日本の上田敏という詩人が次のような詩を作っています。

FAITH

キリスト教徒 血に渴き
群羊守る力なき
異教の民の声呑むを
……
架れ主のごとく十字架に

キリスト教の信仰を世界に伝えるという美名のもとに、血に渴いて戦争をおこした。異教徒たちはただ声を呑むだけだ。しかし、そんなことが許されるはずがない。真のクリスチャンならば、宗教を弘めるために戦争をするより、主イエスのように自ら十字架にかかって異教徒を救うべきではないか。戦争による宣教など、もってのほかだ。愛の神は決してお許しにならないだろう……というのです。

しかし第2バチカン公会議の決定によって、「教会再一致」と「諸宗教の対話」の路線が開かれて以来、人類は大きな幸福を得ることができました。愚かな宗教戦争はこれではっきり終結宣言されました。私はこれを人類への大きな恵みと信じます。

そしてこの30年、キリスト教徒と仏教徒の間に思想的な対話が進み、そこに宗教者としての交わりが急速に開けたことはご承知のとおりであります。3年あるいは4年おきに日本の禅僧がヨーロッパの修道院で修道士の生活をする。そしてヨーロッパの修道士の方々が日本の禅寺で坐禅を体験されるというような、東西霊性交流が真剣に続けられております。私はこれを、神の国を地上に建設する努力と考えます。

実は第2次世界大戦以前から、日本のカトリックには二人の優れた神父さんが禅仏教に深い関わりをお持ちでした。お一人は上智大学のデュモリン神父です。デュモリン先

生は「自分はカトリックの信仰を持っているのだから、宗教者として信仰そのものについて仏教に学ぶ必要はない。けれども私は禅ブッディズムの哲学思想と、そこから出てきた禅の芸術というものに深く感銘をうけた。だから、禅ブッディズムの思想と芸術をヨーロッパのキリスト教世界に伝える努力を、戦前から続けてきた」とおっしゃいました。私はデュモリン先生の明確な姿勢に対し、心から尊敬し感謝しております。

もうお一人は多分、同じイエズス会の司祭だと思いますが、ラサール神父さんです。この方は戦後日本に帰化されて愛宮真備^{えのみやまき び}という日本名で生きた方ですが、ラサールさんはデュモリン神父さんとは少し行き方が違って、戦前から禅宗の伝統的な一宗派である曹洞宗の中で坐禅に打ち込んだ方です。ラサール神父は「自分はカトリックの司祭として、神人合一の深い境地に入りたいのだ。絶対者の神と相対者の人間が一つになる、信仰の究極の境地を得たいのだ。しかし西洋の伝統にはそういう方法がなくはないけれども、あまり発達していない。自分は神人合一の境地を得たいから、東洋の坐禅の道を学び、それを体得しようとして戦前から禅寺で坐禅を実践してきたのだ」と、こう言われました。これはクリスチャンとしての立場をもって禅に入って来られたわけで、私はこれも筋がとおっていて、ありがたいことだと思っていました。

デュモリン神父の禅の思想と芸術、ラサール神父の坐禅の実践。これはともに世界カトリックの20世紀の新路線の貴い先達であり、感謝すべき業績でありました。
(次号に続く)